

万休院の宝篋印塔

さとうたくみ

(会員 佐伯市池船町)

戸穴・年ノ神の会員江畑安雄氏より、万休院仁叟の宝篋印塔の移転が終わったとの連絡があり、十一月三日、会員五名で万休院を訪れた。



万休院の開祖仁叟と当石
碑については『佐伯史談一』

会員江畑安雄氏



上・宝篋印塔と六地藏



右・万休院本尊阿弥陀如来像

六〇号』に「万休院仁叟の世界」と題して発表しているが、今回の移転に伴い、地中に埋没していた部分の碑文が明らかになったので、再度紹介しておこう。

〔表〕

一字一石一字三礼二十有遍 柴田氏

○宝篋印塔 歎譽喜雲信士

万休老人恕仁叟謹拝書并鐫 寄付之

〔裏〕

予行年六十八秋為父母法界供養之畢矣

皆享保十九歳甲寅秋十月二十五日

戸穴村願成寺の隠居仁叟は、享保十九年(一七三四)二月二日、願成寺に古来より伝来の万休院古跡の印證を提示して、同村平野にあった願成寺の隠居庵を万休院として再興することを藩に申請した。

この印證とは、佐伯惟治が大永六年(一五二六)に万休院乾席座元禅師に宛てた寄進状で、亡母利娑妙貞の位牌を供養するために畠地五反を寄進すると記された文書で、何故に願成寺に伝来したのか定かではないが、同月下旬、藩はこれを許可し養賢寺の末寺に仰付けた。『御領分中寺社記』には万休院、『古老物語』には万休庵として紹介されている。

この宝篋印塔は、同年十月に仁叟が父母の供養のために建立したもので、正面に父の戒名を刻んでいる。また寄付した柴田氏は仁叟と同族の者であったと考えられる。

このたび老朽した鐘楼が補修され、その中に六体の地藏と共に安置されたことは、この石碑が雨露の風化を免れ、開祖仁叟和尚の徳が永遠に語り継がれることを期待しています。

◆『郷土を知る—大分合同新聞〈灯〉より』

古藤田 太

平成十一年五月刊 B6判 一八九頁



本書は大分合同新聞の「灯」に、七年間にわたり執筆を続けられた古藤田太氏(弥生町文化財調査委員)の歴史探訪記である。『郷土を知る』には、郷土史を中心に七五話が掲載されており、格調の高い記述になっている。

本書の序文で、出納文良氏(弥生町社会教育課長)は、「この書は、先生の郷土に対する深い関心と情熱から、長い年月にわたり踏査し、収集された資料をもとに、郷土の多くの先覚者の思いが描かれています。」と、語っている。本書を一読すると、著者の郷土史に対する熱い思いが伝わってくる。

本文中には、小話ごとに「註」があり、写真や郷土に因む切絵(佐藤巧氏の作品)、友人・知人の小話も添えられている。本書の特色の一つは、どのページから読み始めても楽しく読めて、郷土史の学習になるといって過言はないかと思う。(矢野)